

兵庫県のクワガタムシ

(兵庫県甲虫相資料・105)

高橋 寿郎

兵庫県産のクワガタムシに就いては1度まとめて発表したことがある(1965)がその後この仲間の検討もおこなわれ、県下産のものも学名の変るもの、新に分布が確認出来た種並びに全般的に産出状況が割合詳しくわかったりしたので現時点での県下産のこの類を再度まとめてみた。

現在の日本産クワガタムシ科は4亜科、14属、35種いることが知られていてその内本州産は4亜科、11属、17種である。兵庫県には3亜科、10属、14種(他に1種分布の疑わしいものあり)が記録され、ほぼ本州産の全部を産していることになる。

始めに大上宇一氏の播磨産甲虫類(1907)の中に *Ceruchus lingnarius* Lewis, 1883 ツヤハダクワガタの記録があることに就いてふれておきたい。産地とか採集データの無いのが残念であるが同定については松村博士の日本千虫図解によるとあるから同書第3巻, Pl. 45, f. 4によってであると本種ではなく *Figulus binodulus* Waterhouse チビクワガタではないかと考えられる。この種に就いては県下からこれ以外の記録がないので県下に確実に分布しているかどうかかわからない。本報文では一応この種は省いてある。

兵庫県産クワガタムシ類の研究史

1875. E. v. Harold. Verzeichniss der von Herrn T. Lenz in Japan gesammelten Coleopteren.
Abhandl. Nat. Ver. Bremen,
IV : 283-296.

兵庫県のクワガタムシの研究は商人として1874~1880年神戸に在留したLenz, Tuison氏が同地で主として甲虫を採集して、それを基としてHarold氏が2篇の論文を発表した中に出てくるこの論文が初めてのものである。ただ論文中に明確に各種の産地を記していないが在日中の地として神戸だけであるから多分神戸と見て良いのではない。ただ若干疑問のある種もふくまれている。

この論文で8新種が記載されている。クワガタムシも1新種 *Psalidoreus inflexus* が記載されている。この種は *Prosopocalius inclinatus* ノコギリクワガタの

ことである。1つ前に *P. inclinatus* を記録しているのにこの種の大臍の変化が大きいことからこの様に別種に扱われたのであろう。他に *Eurytrachelus platymelus* Saund. = *Serrgnathus platymelus pilifer*, ヒラタクワガタ, *Dorcus hopei*, オオクワガタが記録されている。

1876, E. v. Harold. Bericht über eine Sendung Coleopteren aus Hiogo.
Abhandl. Nat. Ver. Bremen,
V : 115-135.

前記論文の第2報である。今回ははっきりと表題にHiogoからの甲虫となっているから今の神戸地方産のものである。クワガタムシ科は僅かに1種クワガタムシ *Macrodorus rectus* が記録されているだけである。(P.122)

1879, Heyden, L. Die Coleopterologische Ausbeute der Prof. Dr. Rein. in Japan 1874~1875.
Deut. Ent. Zeit. X X I I I,
Heft. II : 321-365.

Dr. Reinは明治8, 9年の2年間東京ドイツ大使館の顧問として日本に滞在。その間漆器や陶磁器、製紙等に就いて調査する一方、前後6回にわたり日本の本州、四国、九州を丹念に歩いて昆虫各目を採集した。その内の甲虫類のみを研究まとめたものがこの論文である。神戸ではその内2回採集をしていて甲虫類全体の記録152種の内66種の多くを記録している。時期的にも大変よい時に出会ったのであろうと思われる。

クワガタムシは次の2種の記録があるのみである。
P. 338. 43, *Eurytrachelus platymelus* Saunders = *Serrgnathus platymelus* Vollenhoven, ヒラタクワガタ、3♂♂、2♀♀、von Hiogo. Die ♂♂ 29-36mill. ♀♀ 26-28 mill.

44, *Macrodorcas rectus*, コクワガタ、4♂♂、6♀♀、von Hiogo.

1902、大上宇一。播磨産甲虫類報告(2)。動物学雑

誌、14(169)：409-414。

大上宇一氏が揖保郡を中心とした播磨地域の甲虫相を発表されたのは1901年のことであり、それ以後1907年頃末までこのあたりの甲虫相の発表を続けられた。この一連の報文が兵庫県下の邦人による甲虫に関する始めてのものであり大変貴重である。但し当時の知見ではほとんど文献が無かった時代で、その種の同定には非常に苦勞されたであろうし、学名などもほとんど記入されていなく和名も著者が名付けたものもあり、またその判断に困るようなものもあつたりしてこの報文で現在の知見の種を決定することは困難である(勿論標本も現存しないであろう)。従つてその意味ではこの報文の利用価値は余りないのであるが何にせ始めての一連の報文だけに忘れることは出来ないものである。

この報文でクワガタムシ科は296、ヒメクワガタ。297、アカアシクワガタ。298、クワガタムシ。299、オホクワガタ。300、メンガタヒメクワガタ(番号は氏の1901年からの一連の報文で記録された播磨産甲虫の通し番号)。学名が入っているのは300、メンガタヒメクワガタだけである。ヒメクワガタとクワガタムシは混同されていたようで真のヒメオオクワガタでなくクワガタムシの小形のものであらうと思われるがこれだけでは判断し難い。オホクワガタもこの地域にいたのかどうかそれ以後このあたりの記録を知らないだけにやや疑問が残る。メンガタヒメクワガタは学名並びに解説からしてスジクワガタの大型の♂ではないかと考えられる。

1907. 大上宇一、播磨産甲虫類。昆虫世界, 11(115)：110-112.

大上氏が1901年から1903年迄に主として動物学雑誌上に発表された播磨地方(揖保郡を中心とした)の甲虫相は充分の文献が無かったことから再び1906, 1907年にわたつてまとめて発表された一連の論文の一つである。甲虫は全部で299種記録されLewis氏の日本甲虫目録の番号も入っていて前回のものからすれば飛躍的に充実した内容になっている。ただ現在の知見では相当の訂正は必要であらう。クワガタムシ科は表記報文に発表されている。

82. クワガタムシ, 83. ノコギリクワガタ, 84. ヒラタクワガタ, 85. ヒメクワガタ, 86. スジクワガタ, 87. ツヤハダクワガタ, 88. ミヤマクワガタの7種が記録されていて全部学名が入っているが現在の取扱では若干変る。和名だけで一応わかるがヒメクワガタは恐らくコクワガタと混同していたと考えられ学名も *Macrodorus montivagus* となっているが真のヒメオオク

ワガタではなかつたように思われる。それとツヤハダクワガタの記録がある。この種は現在兵庫県下での確実な記録はこの報文以外全く無い種である。データも解説もないのでよくわからない。始めにのべたようにチビクワガタの恐れが多分にあるが何んとも云えない兵庫県産クワガタムシの内での疑問種である。

1933. 関 公一、御影町附近産の甲虫目録(其の一)。昆虫界, 1(3)：251-253.

大上氏の播磨産甲虫目録以後久方振りに発表された県下産甲虫目録であり、しかも神戸市御影町と東神戸を中心に摩耶山、六甲山をふくめた甲虫目録で(1934年にわたり4報告にまとめられている)、詳しい産とか採集データが無いのがものたりないが新しく記録される種も多くあり、比較的同定し易いものが多いので同定上の間違いは余りないように思われる(但し実際の採集標本に基く記録かどうか疑わしいものも若干ある)。クワガタムシ科はこの報文に5種記録されている。全くデータは無い。ヒメクワガタは恐らくコクワガタのことであらうと思われる。従つて4種と云うことになりそうである。

1934. 関 公一、大阪・神戸附近産の锹形虫。昆虫世界, 38(437)：17-19.

阪神地方に産するクワガタムシ11種の記録をされている。神戸産と明記されているのはコクワガタ、スジクワガタ、チビクワガタの3種だけである(但し詳しいデータは無い)。

1934. 関 公一、大阪・神戸附近産の锹形虫追記。昆虫世界, 38(440)：131-132.

前報文の修正であり前回のヒメクワガタはコクワガタのことであるとされている。チビクワガタはネプトクワガタのことであると記してあるがチビクワガタは御影あたりでは多くいるようである(芳賀, 1975)。

今迄の報文以後所謂の甲虫目録形式のものにクワガタムシ科をふくめてのものは散見するがクワガタムシだけをとりあげて兵庫県産のものを検討した報文は現れなかつた。そこで筆者は浅学をも省みず兵庫県産のクワガタムシのまとめ的なものを発表したのが次の報文である。

1965. 高橋寿郎、兵庫県のクワガタムシ。兵庫生物, 5(1)：38-46.

本報文において兵庫県産13種のクワガタムシのその時点での分布を中心に出るだけ詳しく報告した。

1969. Kurosawa, Y. A Revision of the Genus *Platycerus* Geoffroy in Japan (Coleoptera, Lucanidae). Bull. Nat. Sci. Mu. 12(3):475~484, pl. 1.

従来ルリクワガタ1種が*Platycerus*属より日本産では知られていたがもう1種(コルリクワガタ)に別けることの出来る種が存在していることがわかり、ここに新種として記載されると共に兵庫県下にも産することが報告されている。

以上兵庫県産のクワガタムシ14種に就いての研究の経緯でありこれら以後では個々の種の生態に就いての報告とか部分的地域での記録などは割合あるが(拙著“兵庫県産甲虫類に関する文献目録, 改定版, 1981”を見て預きたい)、全般的な研究報告は発表されていない。

クワガタムシ科 Family Lucanidae

マダラクワガタ亜科 Subfamily Aesalinae

1. *Aesalus asiaticus* Lewis, 1883 マダラクワガタ
本種はLewis氏により宮の下(箱根)、中禅寺(日光)、Oyayama(熊本の近く)産でもって記載された(Trans. Ent. Soc. Lond., P. 340, pl. 14, f. 5, 1883).

全国的に見てそれ程個体数の多い種ではない。山地の倒木等の朽ちた樹皮下に見出される種でその形態に就いては神谷氏が詳述され(昆虫、4巻、4号、P.227~279, pl. XI, 1930)、後西島氏もその生態を詳しく報告されている(日本の甲虫、3巻、1号、P.11-16, pl. 11, 1939)。種名は勿論“アジアに産する”と云う意味である。分布は日本特産で北海道、本州、四国、九州、御蔵島、対馬が知られている。

県下では氷の山と扇の山しか産地が知られていなく、分布のよくわからない種である。

産地: 養父郡氷の山(奥谷, 1960)*美方郡扇の山(辻, 1963., 辻, 岸田, 1972)。

チビクワガタ亜科 Subfamily Figulinae

2. *Figulus binodulus* Waterhouse, 1873 チビクワガタ (Fig. 1, 12).

本種はWaterhouse氏がS. Japan(G. Lewis氏の採集品)として詳しい産地を明示せず記載された種である(Ent. Monthl. Mag. IX, p. 277, 1873)。その後Lewis氏は本種20頭を1881年5月Konos(九州)に於ける森林中の古い丸太より得たと記録された(Trans. Ent. Soc. Lond., P. 339, 1883)。

生態に就いての報告は見当らない。本属の日本産は他に*F. boninensis* オガサワラチビクワガタと*F. punctatus* マメクワガタを産するがマメクワガタは残念なが

ら県下には産しない。種名は“2つの隆起をもつ”の意、前頭に2つの隆起がある。

本州の分布は広く日本(本州、四国、九州、伊豆諸島)、支那、台湾、トンキンが知られている。

県下でも割合いるようであるが山地帯での記録が今の所ほとんど知られていない。サクラやクヌギ等の皮下や洞穴に見出される。明石公園のような巨木のある所には割合いるようで神戸の藍那も比較的多い。

産地: 洲本市三熊山[久松, 1973, 登日, 1974]。川西市山下、笹部[岡田, 1974]、笹部、見野、大和[仲田, 1978]。塚塚市[中野, 1955]。神戸市裏山[関, 1934]、御影町[芳賀, 1975]、藍那(3 exs., 14-VI-1978)、押部谷木見(1 ex., 23-VI-1980)。明石市明石公園(1 ex., 15-VI-1975, 1 ex., 9-VI-1978, 1 ex., 15-II-1978)、氷上郡柏原町(1 ex., 10-VII-1949, 2 exs., 2-III-1951, 5 exs., 14-III-1956, T. Takahashi leg.)、春日井黒井(1 ex., 3-VII-1950, T. Takahashi leg.)、豊岡市内[高橋, 1975]。

クワガタムシ亜科 Subfamily Lucaninae

3. *Platycerus acuticollis* Y. Kurosawa, 1969

コルリクワガタ

従来ルリクワガタと称されていた種類には明瞭に区別出来る2種類が含まれているとして1969年黒沢博士によって新に命名された種が本種に当る(Bull. Nat. Sci. Mus. vol. 12, No. 3: 478-482, pl. 1, fig. 1)。Paratypesの中には氷の山、扇の山産の各1♂がふくまれている。ルリクワガタとコルリクワガタは各地で混棲しているようで兵庫県下に於いても氷の山、扇の山で混棲しているが音水ではコルリクワガタの記録は無く、ルリクワガタのみを産する。産地は今迄の所県下で3ヶ所しか知られていないが、まだ他に産地はあると考えられる。

産地: 養父郡氷の山[Y. Kurosawa, 1969]。美方郡扇の山[Y. Kurosawa, 1969., 辻, 1972., 辻, 岸田, 1972]

4. *Platycerus delicatulus* Lewis, 1883 ルリクワガタ

本種はLewis氏によりOyayama, Odaigahara, Chiuzenjiにて6月、そしてOntakeにて8月に得られた25♂、20♀♀の標本で命名記載された(Trans. Ent. Soc. London, P. 338, t. 14, fig. 3♂, 1883)。この標本の中には前種*P. acuticollis*がふくまれている大英博物館に保管されている標本を森本博士によって確かめられた経緯が詳しく説明されている(黒沢、甲虫ニュース、No.7:3, 1969)。

*産地で〔 〕の中のものゝは記録からの引用、()の中のものゝは筆者採集、標本所有のもの。

また本種の生活史に就いては下山健作氏の報文がある(昆虫学評論、6巻、2号:10-12, pl.3, 1952)。市川敏之氏は8月30日にルリクワガタ♀の蛹を得たと、さらに秋期朽木採集で若令幼虫(同年の6月頃に産卵された卵から孵化したもの)と終令幼虫さらには成虫が得られたことから成虫になるまで2~3年を要すると考えられる興味深い記録をされている(月刊むし、No122, 1981)。

分布は日本特産種で北海道、本州、四国、九州である。本種の県下に於ける産地は今の所3ヶ所だけである。かなり見つかるのが困難なためと思われるが県下でも他の産地があるものと考えている。

産地: 尖粟郡音水 [Y. Kurosawa, 1969]. 養父郡氷の山 [T. Okutani, 1955, 高橋, 1975]. 美方郡扇の山 [Y. Kurosawa, 1969., 辻, 岸田, 1972]. (1982年になって本州の中央部近く山梨、神奈川、静岡県から *Platycerus kawadai* Fujita et Ichikawa, ホソツヤルリクワガタなる新種が発表された。Elytra, vol. 10, No. 1, pp. 1-8, 1982; 更に長崎県の島原半島からルリクワガタの1新亜種 *P. delicatulus unzendakensis* Fujita et Ichikawa が記載された。l. c., pp. 9-10, 1982, 並びに“月刊むし” No137, 138, 139-1982)。

5. *Lucanus* (s. str.) *maculifemoratus* Motschulsky, 1861 (Fig. 2, 13) ミヤマクワガタ

本種は始めMotschulsky氏により印度原産の *L. cantori* として日本から記録された (Etud. Ent., P. 16, 1860). そしてその翌年Motschulsky氏は *L. maculifemoratus* なる新種記載を日本からした (Etud. Ent., p. 9, 1961)。さらに1866年Motschulsky氏はこの両種共日本に産すると報告している (Bull. Soc. Nat. Mosc. p. 39)。

Lewis氏は1883年次のごとくこの両者に就いて論じている。即ち“Motschulsky氏は1860年Goschkewitch夫人が *cantori* を日本にて採集した事を報じたが、1861年同一材料をもって *cantori* には一言も触れずに *maculifemoratus* なる新種を発表した。アッサムが原産なる *cantori* は証拠不十分なる為、日本の *fauna* より除した”と (Trans. Ent. Soc. Lond., p. 333)。即ちMotschulsky氏の *maculifemoratus* と *cantori* は同一種であり日本に産するものは *maculifemoratus* として取扱はなければならないことになる。

この両者の日本から記載に用いられた標本を実際にモスコウ大学動物学博物館で検された中根博士は *maculifemoratus* のタイプは中形の♂で大腮の基部歯は薄いが中央歯(第3歯)より僅かに長い。Cantoriのラベルのあるものは同一種の小さい♂であると発表しておられる (Bull. Natn. Sci. Mus. Tokyo, 15(3): 421, 1972) Motschulsky氏の命名した1961年にSnellen van Vo-

llenhoven氏が *L. sericans* なる種を日本から記載している (Tijdschr. V. Ent. IV, p. 703)。この記載種も *maculifemoratus* と同一種であり、このことはVollenhoven氏自身もそのように認めているようであるが (Tijdschr. v. Ent. IV, p. 147, 1865), このタイプ標本はオランダのLeiden自然史博物館に保管されていて中根博士はそれを検し写真に撮影示されたがやはりミヤマクワガタの小型の♂であることがはっきりした(北九州の昆虫、26巻、1号, p. 1, pl. 1, 1979) (この標本はシーボルトの採集集品である)。

Parry氏が1862年に産地を東印度産で *L. hopei* なる種を記載した (Proc. Ent. Soc. Lond., P. 108, ♀)。そして1864年に同じ材料によって産地東印度及マレー諸島を掲げた (Trans. Ent. Soc. Lond., p. 9, t. 4, f. 2, 1864), 図はミヤマクワガタと同じものである。

Parry氏はその報告の中で *Hopei* は *sericans* (De Haan M. S.) *Voll.* と同種(?)にして *Miszzech* と彼の採集品にしてライデン博物館に♀あり、産地はジャワでS. van Vollenhoven氏により *sericans* (1861) と書かれたのは誤りで後者は多分 *L. maculifemoratus* の小形変種であろうとしている。三輪博士はジャワとジャパンを当時の状況から混同していたのではないかと云われたが当然それは考えられることである (台湾博物館会々報 21巻、P. 319, 1931)。

その後Parry氏は *hopei, sericans* とも *maculifemoratus* のシノニムであると報告している (Trans. Ent. Soc. Lond., p. 53, 1870)。Heyden氏は本種をアムールより報告し、北支那及日本に産すと付記し、同時に *sericans, hopei* 共に同種なりと報告している (Deutsch. Ent. Zeitschr., p. 276, 1884)。Planet氏は1898年 *maculifemoratus* の変種として *elegans* をLeach氏が函館で採集した1頭(1898)とNing-Poo(支那寧波?)で採集した1頭(共にFairmaireの採集品にある)で記載 (Naturaliste, p. 19&253, f. 2. 2 ♀, 3 ♀, 1896)、他に修道院長A. Dawidより送付せられたエゾ産の2♂♂、2♀♀(同一地方産)もありとある。三輪博士は函館付近産だろうとされている(1931)。

現在の分類では大腮の形態によって日本産のものは3つの型に別けられている。即ち *f. hopei* Parry, *f. nakanei* Y. Kurosawa, *f. maculifemoratus* Motschulsky. *f. hopei* は北海道、本州北部、中央山嶽地帯、稀に九州の山地に産すると云われるが、今の所兵庫県下でこの型のものは知らない。後の2つの型は共に兵庫県に産する。*f. maculifemoratus* の型が一番普通であるとのことであるが兵庫県産のものはむしろ *f. nakanei* の方が多いようである。尤もこれは所有標本によつての比較

で従来記録されているものがどちらの型に属するかは確めようがないのでその点では不十分であるが、大腸の型での区別はそれ程ははっきりとその分布がわけられないので特に別けて取扱う必要は無いように思われる(大阪地方に産するほとんどのものがf.nakaneiである。日浦、1978)。従って産地に就いては型に関係なく記録しておく。

兵庫県では普通種である。神戸市内あたりではノコギリクワガタ、コクワガタの方が多く本種はそれ等に比して少い。本種の種名は“斑紋のある腿節をもった”と云う意味で腿節に横長の黄褐色紋を有する特徴を表わしている。

産地：洲本市先山〔堀田、1973、1976〕。川辺郡猪名川町上阿古谷、木間生〔仲田、1978〕、三草山(2♂♂、5-VII-1980)。川西市笹部、一庫、花折橋付近、横地、西畦野、芋生〔仲田、1978〕、笹部(1♂、21-VII-1958、Tsukaguchi leg, 1♂、16-VI-1959)。宝塚市武田尾(1♀、25-VII-1954)。神戸市御影〔関、1933〕、六甲山(1♂、15-VII-1956)、摩耶山(1♀、21-VII-1955)、布引(1♂、20-VI-1952)、烏原(1♂、VII-1937、2♂♂、VII-1939、1♂、29-VII-1957、1♂、1♀、22-VII-1969)、山の街(2♂♂、4-VII-1954、4♂♂、1♀、19-VII-1959)、大池(1♂、3-VIII-1940)、藍那(2♂♂、5-VII-1959、1♂、1♀、17-VI-1978、1♂、1♀、19-VIII-1978、1♂、30-VIII-1979)。加西市畑(1♂、23-VI-1974、1♀、27-VII-1974)。多可郡市原(1♂、24-IX-1972)。神崎郡大河内町川上(1♂、15-VII-1977)。佐用郡上月(1♂、27-VI-1960)。宍粟郡音水(1♂、1♀、20-VII-1969)。氷上郡〔山本、1958〕。出石郡出石町有子山、三木〔高橋、1963〕、桐野〔高橋、1975〕。豊岡市福田〔高橋、1975〕、養父郡氷ノ山(3♂♂、1♀、27-VII-1956)。美方郡扇ノ山〔辻、1963、辻、岸田、1972〕。

6. *Prismognathus angularis* Waterhouse, 1874

オニクワガタ

本種はWaterhouse氏によりG. Lewis氏の採集した1♀で新種記載された(Ent. Monthly Mag., XI: 6, 1874)。黒沢博士によると産地はKawachiとしておられるが(1976)、原記載には産地は記してなくJapanとのみである。北海道には多くいる種である。本州、四国、九州ではやや山地性のようで、そうたくさんいる種ではなさそうである。九州には亜種morimotoi Y. Kurosawa, 1975を産する。

本種はブナの朽木の中に生活するようで、その幼虫、蛹に就いては林氏の報告がある(ニューエントモロジスト, 9巻、1/2号、P. 32-34, pl. 1960)。同じ属のP. subaen-

eusはMedvedev, S. I. の記載がある(Fauna SSSR, 47: 44-45, 1952)(この種はシベリアから北朝鮮に分布する)。

兵庫県下での記録は氷の山、扇の山のみであり、北部の山地帯にのみしか分布していないようである。

産地：養父郡氷ノ山〔高橋、1959〕。美方郡扇ノ山〔辻、1963、辻、岸田、1972〕。

7. *Prosopocoilus inclinatus* (Motschulsky, 1857)

(Fig. 3, 13)

ノコギリクワガタ

本種はMotschulsky氏によって下田産の標本でLucanus (Hexarthrus?) 属で記載されたものである(Etud. Ent., XL., P. 29, f. 11, 1857)。このタイプ標本は中根猛彦博士が1971年モスクワ大学動物学博物館で検されている。タイプ標本は♂であるが体の前部が無かったと記しておられる(1972)。

Motschulsky氏は1862、1865年にPsalidognathus 属の種として取扱っている(I. C., P. 55, 1862, I. C., P. 13, 1866)。現在属名はHope及びWestwood氏がLucanus caviformis Hope et Westwood, 1845をタイプとして創設されたProsopocoilus属(Cat. Lucan. Coleop., P. 4, 1845)の種として扱われている。

本種は大腸の変化が割合あるので学名に就いても色色混乱があったのではと思ったが意外と問題はないようである。

Harold氏がvar. inflexusとして記録したもの(Abh. Naturw. Ver Bremen, IV, P. 288, 1875)、Thomson氏がCladognathus mandibularisとしたもの(Ann. Soc. Ent. Fr. II (4): 417, 1862)。更にLewis氏がCladognathus属のものとして取扱ったもの(Trans. Ent. Soc. London., P. 33, 1883)いずれも本種のことである。

本種の幼虫ならびに生活史については断片的ではあるが、林(1956)、越智(1968)、西山(1971)の報文がある。クヌギ、ニレ、コナラ、ヤナギ等に来る。時に落葉下にかくれているものもあり、灯火に来ることもある。県下には広く分布しているし個体数も多いようである。神戸市内あたりではミヤマクワガタより多いように思われる。

産地：津名郡志筑〔堀田、1959、1973〕。洲本市先山〔久松、1973、堀田、1973〕、安乎町〔堀田、1973、1976〕。川辺郡猪名川町木間生、日生タウン〔仲田、1978〕、三草山(1♀、5-VII-1980)。川西市笹部、見野、大和、横地〔仲田、1978〕。神戸市御影〔関、1933、後藤、1940〕、摩耶山〔増田、橋本、1938〕、六甲山(1♂、15-VII-1956)、烏原(1♂、3-VII-1933、1♂、25-VII-1936、1♂、VII-1939、2♀♀、VII-1955、1♂、12-VII-1956、1♂、6-

nervisとして命名した種(Etud. Ent. 9:16)がタイプを
 検された中根博士により *rectus* の♀であることを確認
 発表されている(1972)。松村松年博士が日本千虫図解
 に本種の小型のものを *M. montivagus* Lewis ヒメクワ
 ガタ(1906)として掲載されたことからヒメクワガタな
 る種が間違っ報告された時期があった。真のヒメク
 ワガタは *Nipponodorcus* 属のものである。尚三輪博士
 は *rectus* を *Eurytrachelus* 属で取扱っておられる。

本種は県下では普通に産する種である。全国的にも
 普通にいる種なのであるが残念ながら生活史などは全く
 わかっていない(若干の飼育報告はある。越智, *Natura*
Study, 14巻, 5号, 1-5P. 1968)。

産地: 洲本市先山〔久松, 1973, 堀田, 1973, 1976〕、
 安乎町〔堀田, 1973〕、川辺郡猪名川町木間生、上阿古谷
 〔仲田, 1978〕、三草山(1♂, 2♀♀, 5-VII-1980)、
 川西市一の鳥居(1♂, 22-VI-1952, 2♀♀, 17-V-
 1953)、見野、笹部、花折橋付近、横地、黒川、山原、
 芋生、大和〔仲田, 1978〕、Hiogo〔Heyden, 1879〕、神戸
 裏山〔関, 1943〕、御影〔関, 1933〕、二十渉(1♀, 26-
 VI-1955)、鳥原(1♀, 8-VII-1973, 1♂, 3-VIII-1974、
 1♂, 1♀, 10-VIII-1974, 1♀, 31-VII-1977, 1♀、
 6-VI-1980, 1♀, 12-VI-1980, 1♀, 14-VI-1980, 1♀、
 14-VII-1980, 1♀, 5-VIII-1980, 1♂, 11-VIII-1980、
 1♂, 12-VIII-1980, 1♀, 18-VIII-1980, 1♂, 26-VIII-
 1980, 1♀, 5-IX-1980, 1♂, 10-VI-1981, 1♀、
 11-VI-1981, 1♀, 16-VI-1981, 1♂, 17-VI-1981)、
 山の街(1♂, 30-V-1954, 1♂, 1♀, 4-VII-1954、
 1♀, 23-IX-1954, 1♂, 29-VII-1957, 2♂♂, 19-VII-
 1959)、大池(1♀, 22-VIII-1938)、藍那(1♂, 3♀♀、
 19-VI-1978)、白川(1♂, 22-II-1979)、押部谷木見(1♀、
 20-VII-1980, 1♀, 3-VIII-1980, 2♀♀, 24-VIII-1980)、
 三木市美養川々原(1♂, 28-VIII-1978, 1♀, 25-VI-1979、
 1♀, 30-VII-1979)、加西市畑(1♀, 13-IX-1975)、鳥
 羽(1♀, 5-VII-1975, 1♂, 8-V-1976)、神崎郡大河
 内町川上(1♀, 6-VIII-1977)、飾磨郡家島〔上田, 1981〕、
 相生市三濃山(1♀, 6-VII-1973)、佐用郡大撫山(1♀、
 13-III-1976)、宍粟郡音水(1♀, 20-VII-1959, 1♀、
 11-VIII-1978)、多紀郡篠山町〔鈴木, 1958〕、氷上郡〔山
 本, 1958〕、出石郡出石町桐野、郡内〔高橋, 1975〕、城
 崎郡日高町西芝〔高橋, 1975〕、豊岡市立野、全市内〔高
 橋, 1975〕、養父郡氷の山(2♀♀, 2-VII-1953, 3♀♀、
 25-VII-1953, 1♀, 12-VII-1955, 1♀, 25-VII-1955、
 1♀, 27-VII-1957)、美方郡扇ノ山〔辻, 1963., 辻、岸
 田, 1972〕。

10. *Macrodercus striatipennis* Motschulsky, 1861

(Fig. 6, 15).

スジクワガタ

本種は *Motschulsky* 氏により *Yezo* 産で新種記載さ
 れたものである(Etud. Ent., 10:17, 1861)。このタイ
 プ標本は中型の♂で上翅に弱い点刻条線を有すると中
 根博士はのべておられる(1972)。Lewis氏は *Oya-*
yama and Tanegashima から記録された(Trans. Ent.
 Soc. Lond., P.333, 338, 1883)。

*Motschulsky*氏が *M. cribellatus* として記載したもの
 も(Etud. Ent. 10:17, 1861)小型の♂で上翅上に深い条
 線を有するものである(中根, 1972)。

また *Waterhouse*氏が *Hakodate* から記載した *M.*
opacus も本種のこである(Ent. Monthly Mag. VI:
 208, 1870)。三輪博士は *Eurytrachelus* 属で扱ってお
 られる(1933)。

本種も県下に広く分布しているようであるが個体数
 は必ずしも多くない。生活史なども全くわかっていな
 い種である。

産地: 洲本市先山〔堀田, 1959, 1973, 1976〕、安乎
 町〔堀田, 1973〕、川辺郡猪名川町肝川〔仲田, 1978〕、
 川西市一の鳥居(1♂, 22-VI-1952, 1♂, 17-VI-1953)、
 見野、笹部、横地、芋生〔仲田, 1978〕、神戸市裏山〔関、
 1934〕、六甲山(1♀, 29-VIII-1951, 1♂, 10-VII-1955)、
 藍那(1♂, 19-VIII-1978, 2♀♀, 30-VIII-1978)、加西
 市畑(1♀, 27-VII-1974)、相生市三濃山(1♀, 8-VI-
 1974)、宍粟郡坂の谷(2♂♂, 6♀♀, 22-VII-1979)、
 氷上郡〔山本, 1958〕、出石郡伊東町小谷、出石町カジ
 ヤ〔高橋, 1963〕、豊岡市神武山、文教府、長谷〔高橋、
 1975〕、養父郡氷の山(1♀, 25-VIII-1955, 1♂, 27-
 VII-1958)、美方郡扇の山〔辻, 1963., 辻、岸田, 1972〕。

11. *Nipponodorcus montivagus* (Lewis, 1883)

(Fig. 7, 15).

ヒメオオクワガタ

本種は *Lewis* 氏により *Chiuzenji, Junsai, Nanae* (後
 の2つは北海道)産の標本で *Macrodercus* 属の種とし
 て新種記載された(Trans. Ent. Soc London, P. 337,
 pl. XIV, f. 2, ♂, 1883)。

クワガタの所でふれたように本種をクワガタと
 間違っ同定取扱っていたことがあるので古い文献で
 は両者が入り交っている報文がある。三輪博士が新種
 として記載された *Eurytrachelus ezoensis* も本種のこ
 とである(Ins. Mats., Vol. 2, No. 1:27, 1927)。三輪博士
 は *Dorcus* 属の種として取扱っておられる(1933)。
 1960年野村 鎮氏と黒沢良彦博士は共同で *Eurytrachelus*
rubrofemoratus アカアシクワガタをタイプに *Nippo-*
nodorcus 属を創設された(*Tōhō Gakuho*, No.10:41)(前
 胸背の側縁の後角の前で斜に切られ、やや変入する。

前脛節の2叉状の先端の上方からさらに1刺又は2刺を出す、まれに♂だけ単に2叉状のものもあると云う特徴で *Macrodorcus*, *Dorcus* と区別される)。そしてこのヒメオオクワガタもこの *Nipponodorcus* 属の種に取扱れた。

日本全土に産する種であるが個体数の大変少い種のようなのである。朝鮮からは Heyden の記録がある (*Horae. Soc. Ent. Ross.*, 1887)。生活史とか生態に関する報文の全く見られない種である。

本種は県下では扇ノ山、氷ノ山付近にのみ産するようでその他の産は今の所知られていない(若干記録があるがどうも同定に問題があるように思われる。それと前に記していたようにコクワガタと間違えていた時期もある)。扇の山には割合多くいた時期がある様だが現在も同様かどうかかわからない。

産地：養父郡坂の谷〔1♀、22-VII-1979, S. Ogura leg.〕、氷の山〔1♀、12-VII-1963, M. Yoshizaka leg., 1♀、5-VIII-1965, 1♀、19-VII-1971, K. Tsuji leg.〕、美方郡扇ノ山〔1♂、1♀、28-VII-1958, T. Takahashi leg.〕〔辻、1963.、辻、岸田、1972.〕。

12. *Nipponodorcus rubrofemoratus* (Vollenhoven, 1865) (Fig. 8, 15). アカアシクワガタ

本種は Siebold 氏及び Burger 氏が日本で採集された2♂♂、2♀♀標本によって Snellen van Vollenhoven 氏によって新種記載されたものである (*Tijdschr. v. Ent.* 8:152, pl. 2-f, 1, 2, 1865) (*Eurytrochelus* 属として)。このタイプ標本はオランダの Leiden 自然史博物館に保管されていて同博物館を訪ねられた中根博士は写真に撮り紹介しておられる (1979)。また、Motschulsky 氏が *Macrodorcas rectus* として *Etud. Ent.* 10:16, 1861 に発表された♀標本をモスコウ大学動物学博物館で検された中根博士はこの標本は *rubrofemoratus* の♀であったと報告しておられる (1972)。

Lewis 氏は日本各地産を *Macrodorcus* 属の種として報告された (*Lake of Hakone, Chiuzenji, Kiushiu on Oyayama. Trans. Ent. Soc. Lond.*, P.337, 1883)。朝鮮からは河野氏が記録された (*Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa*, XVI, No.84, P.88, 1926)、台湾からは三輪博士が報告 (*Ins. Mats.*, Vol. II, No.1, P.29, 1927) されたがその後の報告 (*Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa*, Vol. 23, No.128-129, P.361, 1933) で脛節赤色を呈せず、肢全体黒色を呈せる種でいずれも♀ばかりなので、種の決定をなし得ずと記しておられる。加藤博士は *Eurytrachelus* sp. タイワンアカアシクワガタとして原色で図説された (原色日本昆虫図鑑、8輯、pl. VII, f.2, 1933)。

これも肢に赤味が無いと記しておられる。形態とも合せて共に三輪博士が1937年記載された *N. yamadai* (*Macrodorcus* 属で記載。 *Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa*, Vol.37, No.166, P.166-168) のことであると思われる。それ以外台湾からの記録もない(尤も *N. yamadai* は野村氏の意見によると *N. rubrofemoratus* の local race ではないかとのこと)。

千島列島(国後島)からは桑山博士の記録がある(南千島昆虫誌、P.338, 1967)。

ビルマに産する *Hemisodorcus arrowi* Boileau (1911, *Trans. Ent. Soc. London*, P.44)、中国、朝鮮に産する *Eurytrachelus haitschunus* Didier et Seguy (1952, *Rev. Fr. Ent.* Vol.19, No.4, P.227, fig.5) の2種は本種のシノニムとして見なされているが、黒沢博士によると *arrowi* は本種の亜種と考えてもよいと述べておられる (1930)。共に標本がないのでなんとも云えない。

以上のようにかなり分布の広い種のようなであり日本の全般に分布していることになる種である。ヒメオオクワガタの所でのべたように1960年本種をタイプとして野村、黒沢両氏により *Nipponodorcus* 属を創設された (Tōhō Gakuho, 10:41)。

兵庫県下では中央部から北に広く分布しているが南部の海岸に近い地域にはほとんど見出されない。川西市あたりでも個体数は大変少いようで県下における北方種である。但し氷の山あたりには個体数極めて多い。

生活史、生態に関する報文は全く見当らない種である。

産地：川西市笹部、大和〔仲田、1978〕、宍粟郡音水〔1♂、11-VIII-1978〕、出石郡出石町和屋〔高橋、1963〕、城崎郡城崎町森本〔高橋、1976〕、豊岡市中喰〔高橋、1976〕、養父郡坂の谷〔1♀、22-VII-1979, S. Miki leg.〕、氷の山〔1♂、27-VII-1954, 31♂♂、14♀♀、25-VII-1955, 12♂♂、9♀♀、27-VII-1957〕、美方郡浜坂町諸寄〔高橋、1976〕、扇の山〔辻、1963.、辻、岸田、1972.〕。

13. *Serrogathus platymelus pilifer*

(Fig. 9, 16). (Vollenhoven, 1861) ヒラタクワガタ
本種は Snellen van Vollenhoven 氏によって Siebold 氏が日本で採集した2♂♂で新種記載をされた (*Tijdschr., Ent.*, IV, P.112, t.6, f.4, 1861) (*Dorcus* 属として)。このタイプ標本はオランダの Leiden 自然史博物館にあり中根博士は2♂共写真にとられて示された (1979)。原記載に描かれたのはその内の大きい方である。

Harold 氏は Lenz 氏の採集した甲虫類の報告の中で

本種を Saunder 氏が茶の産地調査のため支那大陸を旅行せる Fortune 氏の採集になる支那産の材料で記載された *Platyprosopus platymelus* を *Eurytrachelus platymelus* として記録された (Lenz 氏は神戸に1874~1880年の間在留して神戸を中心に採集された商人であるから Harold 氏の記録した種も神戸産であろうと考えられる。Abhandl. Nat. Ver. Bremen, IV:287, 1875)。

Saunders 氏の *P. platymelus* の記載は同時に *Dorcus lateralis*, *D. obscurus*, *D. marginalis* を支那から記載されたが総て同一種の個体変異と考えられるもので最初の頁に記載された *lateralis* は *D. lateralis* Dejean, 1837 (= *Serrognathus bucephalus* Perty, 1831) に先占されるので次ぎに記載された *platymelus* がこれ等の種を代表する有効名となる (Trans. Ent. Soc. Lond. 1ser. III, P. 50, t. 3, f. 7, 1854)。

E. platymelus はその後 Heyden 氏が Hiogo から記録しており (Deut. Ent. Zeit., XXIII, P. 838, 1879)、Lewis 氏は日本から記録された (Trans. Ent. Soc. Lond., P. 333, 1883) 同時に Motschulsky 氏が対島から記録した *Serrognathus castanicolor* (Etud. Ent., P. 12, ♀, 1861) を本種と同一種に取扱れた (Motschulsky 氏の記載は新属、新種であり現在 *platymelus* の亜種として扱われている。この新属 *Serrognathus* が現在ヒラタクワガタ属として使用されているわけである)。

1920年、R. Kriescke 氏はスマトラ、ボルネオから知られている *Eurytrachelus titanus* Boiduval, 1835の地理的変異について論じ、*platymelus* (中南支)、*consentaneus* (中北支)、*pilifer* (日本) をそれぞれ *titanus* の亜種として *castanicolor* を日本産の *pilifer* の異名とされた (Arch. Naturgesch, A, LXXXVI, 1920, P. 117)。

三輪勇四郎博士は、日本、朝鮮、琉球、台湾、支那インドシナ産をすべて *E. platymelus* に統一し亜種の取扱もしていない (Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa, XXIII, 1933, P. 356, t. 2, f. 1-11)。

1960年 Benesh, B 氏は *consentaneus*, *platymelus* を *titanus* の亜種とし、*castanicolor*, *pilifer* を *platymelus* の異名としておられる (W. Junk Coleop. Cat. Suppl. Pars. 8, P. 86-88) (*Serrognathus* 属)。

野村 鎮氏は *Dorcus* (*Serrognathus*) *titanus* の亜種に扱われた (Tōhō Gakuho, 10, P. 42, 1960)。

黒沢博士は雄交尾器が異なるので、インドからスマトラ、ボルネオなどにかけて分布する *titanus* Boiduval, 1835 とは異なり従来用いられていた *platymelus* E. Saunders, 1854 が種名になるとされ現在この取扱が用いられている (国立科学博物館専報、第3号、P. 292, 1970)。

本種は産地によって日本に産するものにも亜種が次のようにある。対島、朝鮮、南満州に産する *ツシマヒラタクワガタ* subsp. *castanicolor* Motschulsky, 奄美諸島に産する *アマミヒラタクワガタ* subsp. *elegans* (Boileau)、沖縄諸島に産する *オキナワヒラタクワガタ* subsp. *okinawanus* (Kriesche)、与那国諸島 subsp. *sakishimanus* (Nomura)。

極東地方でのヒラタクワガタの分布は黒沢博士が詳しく論じられている (1970)。それによると本種はインドシナ半島の北部から支那大陸を北上し、一部は台湾から琉球諸島にいたり一部は直接日本に侵入し、残りには北支那から南満州、朝鮮にいたっている。

本州、四国、九州に分布している亜種 *pilifer* は琉球諸島あたりにいる亜種とは割合異なり支那産の *platymelus* に良く似ていると。そこでこの *pilifer* の日本に侵入した経路は揚子江以南の山岳地方から直接九州に通ずる地域で琉球を経てとか朝鮮を経た経路ではないのではないかと述べておられる。

本州では関東以西の西南日本には割合産するが関東地方では稀少となり、東北地方の大部分には産しないのことで南方系種の様子が良くうかがえる。

兵庫県下でも広く分布し産するが個体数は特に多いたとも思われない。

若干の飼育の記録 (越智、1968) はあってもその生活史、生態はほとんどわかっていない。

産地：洲本市安乎町〔堀田、1973〕、津名郡志筑〔堀田、1959、1973、1976〕、川辺郡猪名川町上阿古谷〔仲田、1978〕、三草山 (1 ♀、5-VII-1980)、川西市一庫、山原、見野、笹部、横地、大和〔仲田、1978〕、Hiogo〔Heyden、1879〕、神戸市御影〔関、1939〕、鳥原 (1 ♂、23-IX-1939、1 ♂、16-VI-1975、1 ♀、2-IX-1980)、山の街 (1 ♂、VII-1937、1 ♂、23-IX-1954)、長田 (1 ♂、6-VII-1938)、飾磨郡家島〔上田 1981〕、氷上郡〔山本、1958〕、出石郡出石町三木〔高橋、1963〕、豊岡市愛宕山、志野〔高橋、1975〕、美方郡扇の山〔辻、1963、辻、岸田、1972〕。

14. *Dorcus hopei* (E. Saunders, 1854) オオクワガタ (Fig. 10, 16)。

本種は Saunders 氏が支那の茶の産地から *Platyprosopus* 属で記載されたものである (Trans. Ent. Soc. Lond., 111, P. 58, 1854)。

日本からは Harold 氏が *Dorcus hopei* として記録された (Abhandl. Naturw. ver. Bremen, IV, P. 287, 1875)。Lewis 氏も同じ学名で Kobe, Kyoto, Sendai を産地に記録された (Trans. Ent. Soc. London, P. 338, 1883)。

三輪博士もこの学名で日本に広く産すれども個体数

多からずと記録されている(Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa. XXIII, 128・129:362, 1933)。

野村 鎮氏は1960年、アッサム、インドに分布している *Lucanus curvidens* Hope の亜種として取扱われた。現在では *Dorcus hopei* として取扱われている。

生態に就いての詳しい報告と云うのは無いようであるが話題の虫だけに飼育などされている方が結構多くいたりする関係から断片的ではあるがその生態の報告が散見される(越智、1968、中村、1971、石飛、1972)。

兵庫県下では本種は特に川辺郡猪名川町、川西市笹部付近での産は良く知られており現在でも昔のような多産とまででなくともやはり可成り産する地域である。その他の県下の産は散発的であり特に北部、西部での産はほとんど知られていない。分布状況の余りわからない種である。

最近ではマスコミなどに取り上げられて兎角話題になっている虫でもある。

産地：川辺郡猪名川町上阿古谷〔仲田、1978〕、川西市見野、笹部、大和、花折橋付近、横地、黒川、芋生〔仲田、1978〕、笹部〔仲田、1971、1972、五十嵐、1972、岡田、1974、山岡、1974、弘世、1978〕(1♀、21-VII-1959、S. Tsukaguchi leg., 3♂♂、9-VII-1961)、多田〔弘世、1978、芳賀、1974〕、神戸市東灘区西鈴蘭台〔芳賀、1974、1977〕、鳥原(1♂、1♀、21-VII-1938)、多紀郡篠山町〔鈴木、1958〕、氷上郡春日部、黒井〔山本、1958〕、出石郡出石町松ヶ枝〔高橋、1963〕、美方郡扇ノ山〔辻、1963., 辻、岸田、1972〕。

以上14種のクワガタムシが兵庫県に分布することがわかっている。始めに記したように本州産クワガタムシと云うことからすれば後3種が記録されていないがこれ等も或は分布しているのかも知れない。今後の調査に待ちたいと考えている。

(August—1982)

(S.45:Toshio Takahashi 神戸市)



Fig. 1. *Figulus binodulus* Waterhouse チビクワガタ
神戸市西区押部谷産(1♂、23-VI-1980)
体長 12mm(大腮をふくまず、以下同)

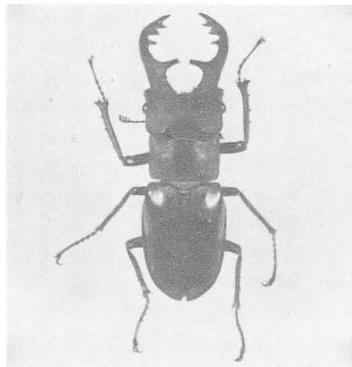


Fig. 2. *Lucanus* (s. str.) *maculifemoratus* Motschulsky
ミヤマクワガタ
神戸市藍那産(26-VI-1978)

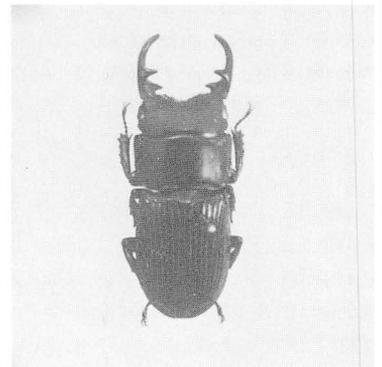


Fig. 4. *Aegus leavicolis subnitidus* Waterhouse
ネトクワガタ 川西市一の鳥居産
♂、17-VI-1953 体長 27mm

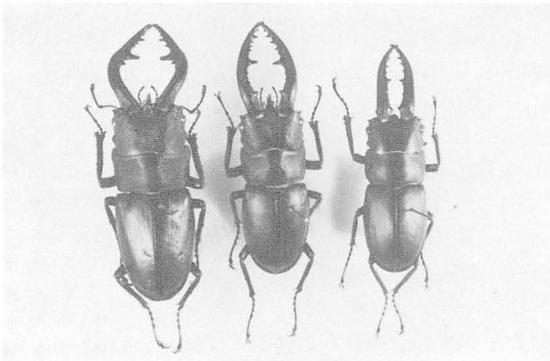


Fig. 3. *Prosopocoilus inclinatus* (Motschulsky, 1857) ノコギリクワガタ
神戸市鳥原産 1♂ 18-VI-1981, 41mm 同 1♂ 30-VI-1967., 37mm
同 1♂ 12-VI-1956, 32mm (左から)

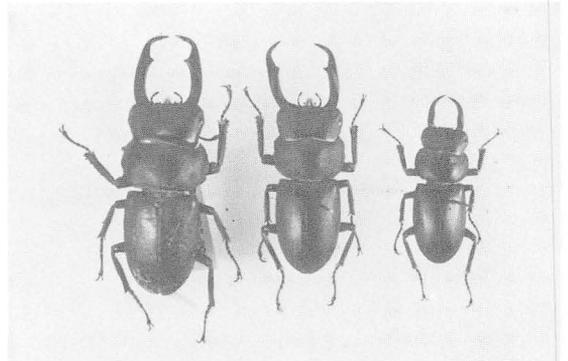


Fig. 5. *Macrodorcas rectus* (Motschulsky, 1857) コクワガタ
川西市笹部産 1♂ 8-VI-1962、体長 33mm 神戸市藍那産 1♂ 19-VI-1978、体長 28mm 鳥原産 1♂ 26-VI-1980、体長 22mm (左より)

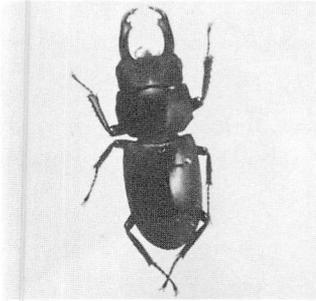


Fig. 6. *Macrodercas striatipennis* Motschulsky
1861 スジクワガタ 養父郡坂ノ谷産
1♂ 22-VI-1979、体長 21mm

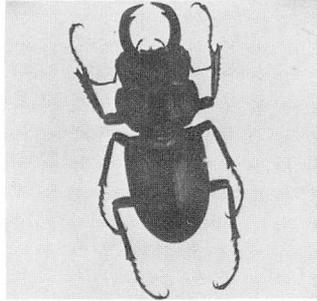


Fig. 7. *Nipponodorcus montivagus* (Lewis,
1883)、ヒメオオクワガタ 美方郡扇の
山産 1♂ 28-VI-1958、体長 34mm

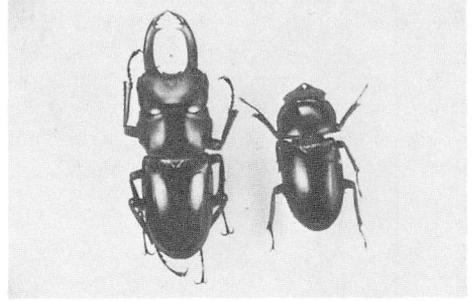


Fig. 8. *Nipponodorcus rubrofemoratus* (Vollenhoven, 1865)
アカアシクワガタ 養父郡氷の山産 1♂ 22-VI-1957
体長 34mm、1♀ 25-VI-1955 体長 31mm

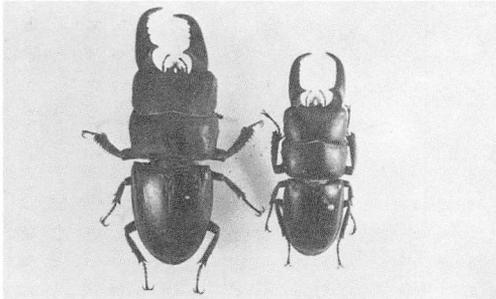


Fig. 9. *Serrognathus platymelus pilifer* (Vollenhoven, 1961) ヒラタクワガタ
神戸市島原産 1♂ 11-VI-1975 体長 46mm(左)
川西市笹部産 1♂ 8-VI-1962 体長 37mm(右)

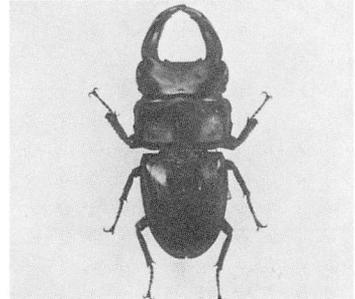


Fig. 10. *Dorcus hopei* (E. Saunders, 1854) オオクワガタ
川西市笹部産 1♂ 7-IX-1961、体長 54mm

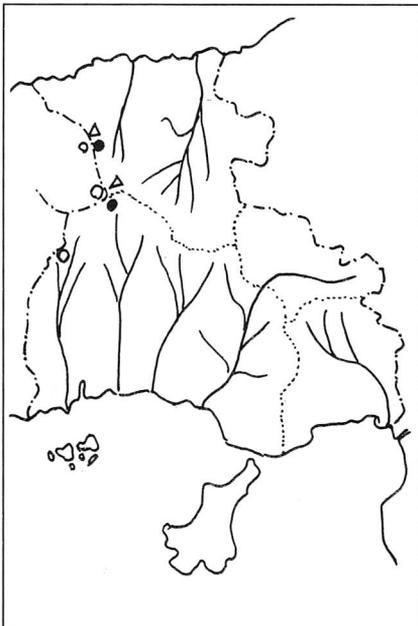


Fig. 11. マダラクワガタ (△)
コリクワガタ (●)
ルリクワガタ (○)
の記録地点

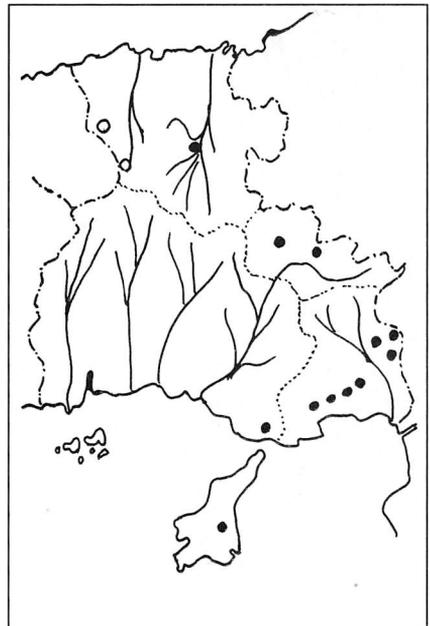


Fig. 12. チビクワガタ (●)
オニクワガタ (○)
の記録地点

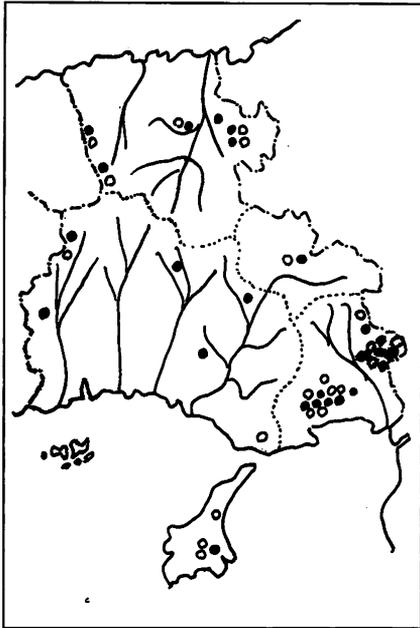


Fig. 13. ミヤマクワガタ (●)
ノコギリクワガタ (○)
の記録地点

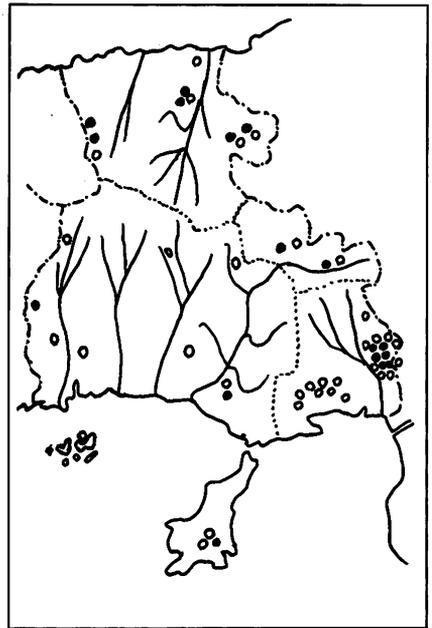


Fig. 14. ネブタクワガタ (●)
コクワガタ (○)
の記録地点

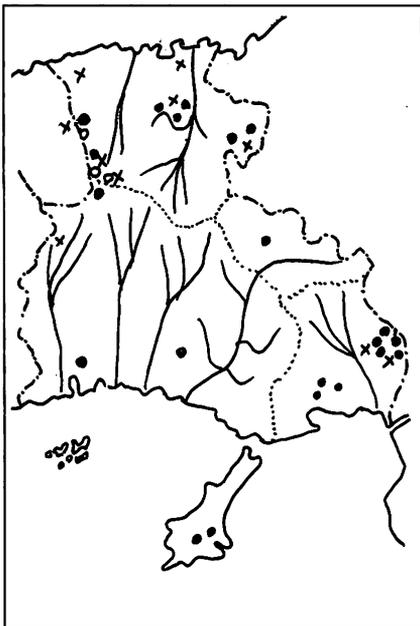


Fig. 15. スジクワガタ (●)
ヒメオオクワガタ (○)
アカアシクワガタ (×)
の記録地点



Fig. 16. ヒラタクワガタ (●)
オオクワガタ (○)
の記録地点